Armored Battleship St. Elmo's fire

海鈴瑠香

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

温暖化によって上昇した水位、それによって起きた利用可能地帯を賭けた戦争　そのさなか　突如として現れた『霧の艦隊』によって海と繋がりと動きを封じ込められた近い未来

停滞を切り開くため、足掻き続けているのは日本だけではなかった。

『霧の艦隊』の圧倒的な戦力差に歯向かいながら、とある国は総力を挙げて鹵獲に成功した

二隻の『霧の艦船』を改造し、アドミラリティ・コードに次ぐ新たな命令を与える。

全てを焼き尽くせ　と

目次

prologue ―― 1

prologue

２０３９年　人類は自らが今の今まで営んでいた所業、地球温暖化によってその活動可能領域の多くを海中に没した。

それは旧来まで予想されてきた水と鉱物・化石資源を巡る闘争から一挙として残された土地を巡る闘争へと多くの国々を駆り立て、また其処に住む人々は残された土地に、正にしがみ付く様にして生きていた。

しかし、仮にこの世界に〝神〟と言う不確実なものが存在し得るとしたら、まさにこれだけでは贖罪にならぬというように、人類の前に新たな脅威が姿を表した　海原に沸き立った、色のない『霧』と共に。

ソレらは大小様々な艦船であった。しかもソレらは皆、その船体に輝くエネルギーラインを縦横に走らせていた。

その特異性はさにあらず、その艦船は人智の及ばぬ奇異な技術によって構築され、立ち向かった軍隊のその悉くが水底へと還った。　その上、ソレらは戦線を押し上げていきながら、海上に特殊な電磁波を撒き散らし、挙句人類が海底に敷設した海底ケーブル

を残らず破壊し、各国間の通信手段を主要なシーレーンと共に断絶していったのである。

結果として今日の人類は、大地を失い　空を閉ざされ　あまつさえ幾らか広くなった海さえもを喪失した。

極めて受動的な鎖国状態という人類史類を見ない屈辱が世界を覆った瞬間である。

そして動くことを封印された世界は流れのない川辺の淵の如く、全てが滞り、〝澱み〟が緩やかに世界中に拡散していった。

後に人類は、自らの世界に停滞を齎したその勢力を　その圧倒的な暴力を『霧の艦隊』と呼称した。

そしてこの地球に住む遍く人間に、海に対する畏怖と恐怖を刻み付けたのである。

一握りの『可能性達（イレギュラー）』を除いて。

かつていくつかの戦争があった
そして様々な天災や気象異常から　世界の環境は加速的に悪化していった
避けようのない資源の枯渇から　人々は争いをやめる事ができず
拡大していく格差と汚染は　やがて限界をもたらした
ひとたび悪化した環境は容易に改善されることは無く
むしろ変化に伴って生じた様々な災害の伝播によって
我々の住む世界は急速に失われていった
しかし　それだけでは終わらなかったのはこの世界の全てが知るところである
我々は残されたのだ　この閉ざされた世界に
かつて人類のつくり上げた繁栄は　霧と共に失われ
またその過程で　世界は繋がりを失った
撒き散らされた電波は総ての大洋を覆いつくし
大海原から　人の営みは消え失せた

大地も汚染されつくし
残されたわずかな土地に　我々はしがみつくように生きている
そしてそれでもなお戦いは続いている
我々自身の愚かさが故に
我々は救済されねばならない　世界はまだ死んでいないからだ
世界は生き延びなければならない　我々はまだ生きているからだ
人々よ　我々には使命がある　意思がある
それは我々が生きている証だ　世界がまだ死んでいない証だ
人々よ　我々は戦うべきだ
立ちはだかる全ての敵となるものを　例えそれが何ものであろうとも
我々自身の力によって排除するべきだ
それが我々の愚かしさの証だとしても

それこそが我々自身が生きている意味

我々が生きるための　最後のよすがなのだから

某国軍総司令官の

国内放送演説